動 向

早稲田大学西アジア考古学勉強会の紹介

久米正吾・小泉龍人

Information on the Workshop for West Asian Archaeology, Waseda University

Shogo KUME, Tatsundo KOIZUMI

経緯・活動

早稲田大学西アジア考古学勉強会は、おもに西アジアと近隣の考古学を専攻する大学院生・学部生を中心とする若手の集いである。1986年に食い道楽も兼ねた場として本会の前身が立ち上がり、1991年に発表・討論形式の会として再スタートし、ほぼ12年が過ぎた。当初は、助手と大学院生によるサロン的な集まりだったが、来る者拒まず、去る者追わずのスタイルが功を奏したのか、西アジア以外の専攻生や他大学からの学生も増え、現在30名を越える大所帯となっている。

参加者は、関東のおもだった大学の学生から成り、2002年度の参加者の所属大学・機関はおよそ15ほどにのぼる。各自が参加しているミッションの調査地も、シリア、ヨルダン、イスラエル、トルコ、イラン、さらにはエジプト、ギリシャ、ブルガリア、パキスタン、インドなど多岐にわたり、取り組んでいる時代も多様である。海外に留学する仲間も増えてきている。

ほぼ隔週木曜日に、早稲田大学文学部考古学研究室（39号館1階）奥の実習室で本会は開催されている。例年統一したテーマに沿って大学院生以上のメンバーが発表し、引き続き活発な討論が行われ、さらに居酒屋に流れて議論が白熱することもしばしばある。

2002年度のテーマは「生業」で、2003年度も継続の予定である。これまで扱ったテーマには、「土器」、「生業にかんする道具」、「葬制」、「セトルメント」、「交易」などがある。また、テーマ発表以外には、卒業論文や修士論文の提出予定者に中間発表をしてもらったり、西アジア考古学会やオリエント学会などでの研究発表にそなえた予行演習の場としても活用してもらっている。

大学の垣根を越えた若手の集いであるからこその強みとして、単なる発表・討論の場に終わらず、世代の近い若者が互いに学問的な刺激を与えあったり、進学や留学の情報交換をしたり、人に言いにくい悩みを聞いてもらったりする場にもなっている。

これから西アジアや近隣の考古学を学びたいと思っている人、関連授業を受講できなくてどうしたらいいか分からない学生、だれでもいつでも大歓迎だ。関心のある方は下記まで遠慮なく問い合わせて欲しい。なお、毎回の案内とこれまでの発表題目・要旨（2002年度分より）がWeb上で公開されているので、こちらも参照されたい。

久米正吾（幹事）kume@fuji.waseda.jp
小泉龍人（代表）tatsundo.k@nifty.com
http://www.littera.waseda.ac.jp/major/archaeology/activity/activity.html

2002年度発表要旨（Web掲載分を一部修正）

第1回（2002．5．9）

馬場匡浩（早稲田大学）「古代エジプト・ナカダ文化における土器研究」

本発表は、2001年度に提出した修士論文の一部である。ナカダ文化とは、先王朝時代を代表する文化であり、統一王朝成立という古代エジプトの初期国家をもたらした中心的文化である。しかし、当文化の遺物、特に土器はこれまで明確な整理・分類が行われておらず、詳細な研究の遂行を妨げてきた。そこで、先ず土器の分類・型式設定を行い、国家形成に関する分析を試みた。遺跡毎に土器の器種組成を構築し、時期別に見た遺跡間の独自性と共通性を提示した。これにより、時期が下るにつれ、大規模遺跡を中心にして地理的に近い遺跡が近時性を帯びていく変化が看取された。この傾向は、王朝統一前のナカダ文化内部における地域統合を示すと思われ、国家形成のプロセスを考察する際の基盤を得ることができた。

第2回（2002．5．16）

安倍雅史（東京大学）「農具を作る先史遊牧民：ジャフル石刃の研究」

ヨルダン南部のジャフル盆地は、年間降水量50mm以下で、典型的な沙漠が広がっている。この土地は、伝統的にベドウィンと呼ばれる遊牧民によって利用されてきた。90年代に入り、この盆地内からジャフル石刃と呼ばれる特異な石器の製作址が続々と報告されるようになる。従来、この石刃石器群は、中期旧石器時代、後期旧石器時代の遺物として報告されてきたのだが、本発表では、この石刃は、実は、前期青銅器時代に位置つけるのが妥当であることを

西アジア考古学　第4号　2003年　137-140頁
©日本西アジア考古学会

まず明らかにした。前期青銅器時代、ヨルダンでは、エジプトやメソポタミアに若干遅れ都市化が進行する。この都市化とともに人口を支えるため農地が拡大し、農耕具が改良されたことが知られている。ジャフル盆地の先史遊牧民も、この状況の中、新たなビジネス・チャンスを見つけ、職能集団としての腕を発揮するようになる。より効率的な農業を実施するため大量の良質の鎌刃を求める農耕民のために、ジャフル盆地の良質のフリントを用い、先史遊牧民が大量に製作するようになったのが、ジャフル石刃であった。

第3回（2002．5．30）

小髙敬寛（早稲田大学）「テル・エル・ケルク遺跡出土の精製彩文土器」

1997年から始まった北西シリア、ルージュ盆地に所在するテル・アイン・エル・ケルク遺跡の発掘調査では、ごく少量ながらハラフ土器やサマッラ土器と考えられる土器（精製彩文土器）が出土している。なかにはハラフ前期からそれ以前にまで遡る土器片もみられ、これまでハラフ土器の到達がハラフ中期以降と考えられていた北レヴァントに新たな知見をもたらした。そこでこの土器片の意味するところを、第一に編年上の視点から、第二にサマッラ土器／ハラフ土器が北レヴァントの土器アセンブリッジにもたらした影響という視点から、それぞれ検討した。結論として、これまで北レヴァント先史時代の編年的枠組みを担ってきたアムーク編年では設定されていない、エル・ルージュ編年でいうエル・ルージュ２ｄ期の存在が確かめられることを述べ、そして、北レヴァントの暗色磨研土器の伝統は根強く、ハラフ土器の装飾を模倣するにあたり彩文ではなく暗文を採用していったのではないかという見通しを示した。

久米正吾（早稲田大学）「タル・イ・バクーンＡ遺跡の再検討」

タル・イ・バクーンＡ遺跡は、ザグロス山脈南部、コル川流域に位置する小規模な銅石器時代の遺跡である。これまで、この遺跡の村落構造として機能的すみわけのあったことが指摘されてきた。物資管理用の道具を多数出土した遺跡北側の建物群（行政管理域）と、数基の土器焼成窯が認められた南側の建物群（工房域）という居住域の分化が強調されたためである。けれども、行政管理域とされる北側の建物群の出土遺物をみると、きわめて多様な遺物が出土していることがわかる。土器の生産にかかわるような遺物も多数みられる。そうなると、これまでの見解に疑義を呈する余地もでてくる。本発表では、北側の建物群から出土した遺物を再評価する作業を試みる。具体的には原位置で出土した遺物をもとに、想定される諸々の活動を復元することによって、北側の建物群でいかなる空間利用がなされていたかを提示した。得られた結果は、北側の建物群が少なくとも６世帯ないし７世帯からなる世帯群を形成しており、この世帯群の内側で労働分化や専業化が進行していたことを示唆した。

第4回（2002．6．13）

近藤康久（東京大学）「アナトリア・北シリア先史時代の生業におけるブドウ栽培／ワイン生産の位置」

今回の発表では、先史時代のブドウ栽培（viticulture）とワイン生産の生業内における位置づけを試みた。ブドウ（*Viticeae*）は人類が古くから食料として利用してきた植物の一つである。野生種（*Vitis vinifera subsp. sylvestris*）から栽培種（*Vitis vinifera vinifera*）への進化は、新石器時代以降、選択的採集を経て徐々に進行し、トランスコーサカス地方では紀元前４千年紀までに達成されたが、アナトリア・北シリア方面におけるブドウ栽培は、前期青銅器時代（紀元前３千年紀）に本格化した。そこでは、土器アセンブリッジにおいて飲酒に用いる坏の割合が増加することがワイン生産の傍証となっている。今回の発表では、まずブドウの栽培化（domestication）の過程とワイン生産のプロセス、考古資料から生産活動の証拠を検出する方法の概略を紹介した後、先史遺跡におけるブドウ栽培とワイン生産のあり方を概観した。そして、エジプト・ヒッタイト等の図像および文字資料を適宜参照しつつ、ブドウ栽培とワイン生産の生業における位置を考察した。

第5回（2002．6．20）

山口大介（東京大学）「ギリシア新石器時代生業研究の現状」

今回の発表では、まずギリシア新石器時代の生業研究、とくに植物遺存体と動物遺存体の研究からわかる生業形態について概観した。その上で、現在の研究の視点がどのような方向に向かっているのかを近年の研究動向から考えてみた。新石器時代のギリシアに突如として現れる農耕・牧畜を主体とする生業形態は、その野生種の分布域から考えて明らかに西アジアからの導入であるとされているが、それがなぜ、どのようにギリシアにやってきたのかについては、いまだに決着をみない問題である。ここではその起源問題ではなく、新しい生業形態がギリシアの新石器文化の中でどのような意味を持っていたのかについて、遺物研究の現状からも考察した。

第6回（2002．7．11）

千本真生（東海大学）「北西トルコにおける生業活動：土器新石器時代から前期銅石器時代」

アジアとヨーロッパを結ぶトルコ、特にその北西部は、農耕・牧畜に代表される新石器文化がどのようにして南東からもたらされ、そしてどのようにして西方にもたらされたか、といった議論に関して重要な位置にあると考えられる。しかし、この地域における考古学調査は1980年までほ

とんど行われず、その具体的なところは示されてこなかった。ところが、1980年頃からトルコ隊や外国隊による調査が増加し、少しずつではあるが研究成果が各隊の研究者から提出されてきているのが現状である。本発表では、まず北西トルコにおける考古学研究の流れを簡単に追った。そして、土器新石器時代から前期銅石器時代の当地域における生業、主に農耕・牧畜については動植物資料を、また漁労については若干の考古学的資料もとりあげることでその様相を示した。それから、アナトリア（現トルコのアジア側を指す）中央・南西部の資料と比較検討することで、生業における北西トルコの位置付けを試みた。

第7回（2002．7．25）

下釜和也（東京大学）「ウバイド期の祭司階層：非生産階級？」

近年のメソポタミア・ウバイド期の社会に関する議論の中で、社会の複雑化の過程とともに「祭司」の存在が理論的に検証され、その社会的意義が重要視されるようになってきている。一方で、墓制・遺構などの研究からウバイド期社会は比較的等質的な社会であったといわれている。このような現在の研究状況を踏まえ、本発表では、祭司階層の実在性と社会内での意義について検証可能性として検討した。まず一般的な意味での生業を行わず、祭司宗教活動に専門的に従事する人々の集団を、専業的非生産階層としての祭司階層と捉えた。そういった集団の出現と、当時進行しつつあった土器生産などの各種専業化とを関連させて考察した。さらに、該期の土偶・彩文土器文様と比較しながら、人工的な頭蓋骨変形の諸事例と祭司階層との関係性を考察した。

第8回（2002．11．7）

遠藤　仁（東海大学）「南アジア・デカン金石併用諸文化の生業」

デカン金石併用諸文化とは、インダス文明が衰亡し都市が解体した後、紀元前2千年紀を中心にデカン地方に展開した農耕文化である。この文化は特徴的な彩文土器により5つの文化に分けられており、農耕の他に狩猟、漁撈を含めた複合経済に支えられ、いずれも同様の生業と技術上のレベルを共有していた。本発表では生業の中でも特に農耕に目をむけ、拠点的な村落イナームガオーン遺跡とその近隣の小規模村落ワールキー遺跡の関係を両遺跡の農具（鎌刃）の分析から考察した。また、該期の生業活動における専業化を遺跡内の遺物分布状況から推察し、特定の職能集団の存在から該期の階層分化システムについて展望した。

第9回（2002．11．21）

秋山淑子（駒澤大学）「エジプト新王国時代アマルナにおけるGarden Shrineの一考察」

庭園内祠堂とはエジプト中部のテル・エル＝アマルナに建設された住居、特に比較的社会的階層の高い人物の住居の庭園に付属する祠堂である。これは、当時のアクエンアテンの宗教改革により盛んになった、唯一神アテン崇拝の施設の一部であるが、実際には仲介者として神と同一視された王ないし王家への信仰の表れであった事が出土遺物より推定できる。Garden Shrineの建設目的としては、純粋に宗教目的であったという考察、自己の権威を誇示する装飾的な目的であったという考察がなされている。本発表ではGarden Shrineの平面形態、同様の家庭内での信仰施設であるHouseAltarとの関係などから、その建設目的を考察し、当時の宗教形態についての新しい見解を加えることを目的とした。

喜田浩資（早稲田大学）「ハラフ土器の文様について：土器の文様からみたハラフ文化の広がり」

ハラフ土器は西アジア先史時代の中でも最も優美な彩文を持つ土器であり、アナトリア、レヴァント、北メソポタミアにかけて広がる肥沃な三日月地帯に沿って、その北側に広く分布している。ハラフ土器は全体として画一的であるが、その一方で各地域の間に差異があることも知られている。ハラフ土器分布圏はその起源地とされている北イラク、北東シリアといった中心地域と、外側の周縁地域に大別できると考えられる。これまでの研究によって、前者の方がより豊富なアセンブリッジを持つことが明らかになっている。本発表では、土器の文様の上から、中心地域と周縁地域の間にどのような相違点、また類似点があるのかを明らかにすべく考察を行った。

第10回（2002．11．28）

小野塚拓造（慶応義塾大学）「ペリシテ人文化の再考：食器に施される化粧土の分析を中心に」

ペリシテ人は「海の民」の一派で前12世紀初頭にパレスチナ南部に定着し、ペリシテ土器などの特徴的な物質文化を残した。ペリシテ土器は早くからペリシテ人研究の中心であったが、土器組成全体から見ればわずかな要素である。また複数の民族集団が共存していた鉄器時代初期に発展したものであり、ペリシテ人と無批判に結び付けてしまうことはできない。そこで本研究では鉢形土器に塗布される白色化粧土と赤色化粧土の割合と変遷に注目し、ペリシテ人の物質文化について再考した。その結果、シンプルな鉢形土器に施される白色化粧土はおそらくペリシテ人の影響であることが分かった。また白色化粧土の減少と赤色化粧土の増加はペリシテ人の土着化を示しているといえる。アシュドド、テル・カッシーレ、ゲゼルにはこのような化粧土の使われ方に明確な差異があり、そこに現れている各々の都市の性格を考察した。

藤巻善人（青山学院大学）「初期新アッシリアの西方拡大について：象牙製品を用いた検証」

今回の発表は、紀元前1千年紀初頭における、新アッシリアの西方拡大について、象牙製品を題材として検証してみた。まず、王碑文中に見られる象牙製品、象牙について取り上げ、アッシリアがどの地域から獲得しているのかを概観することにした。その後実際に、アッシリア地域から出土している象牙製品とシリアやイスラエルなどから出土している象牙製品が一致するのかという検証を行なった。この検証では、当時の象牙製品にみられる様式である、Flame and Frond Style と Intermediate Style を用いて、アッシリアから出土したものと地域から出土したものを直接比較し、検証してみることとした。この検証によって、アッシリアが西方地域から象牙製品を獲得していたということを、文献に示されているように証明するよう試みた。あわせて、それが交易による獲得ではなく、貢納品・戦利品として獲得していたことを表すことによって、アッシリアが文献などに示されているように、実際に西方へ拡大していたことも確認された。

第11回（2002．12．5）

菊野英央（國學院大学）　「エジプト古王国時代第4王朝時代ギザのピラミッドに付属する施設についての考察」

エジプトでは、古王国第4王朝時代のギザ台地においてピラミッドに付属する労働者居住区を示すものが発掘されている。こうしたものは、それぞれが実際にどのような役割を果たしたかの問題や、また、それらが文献資料の中で述べられる「ピラミッド都市」ではないかなどの議論がある。特に、エジプトにおいては都市・集落遺跡の発掘が非常に困難であるという問題もあり様々な議論がある。しかし、ギザにおける過去の発掘や近年発掘された Heit el-Ghurob は、この場所で労働者による食料生産活動、工業的活動を示すものが残されている。Lehner はこうした場では大規模な労働者組織が存在したと考えている。本発表では、こうしたギザで過去から近年に発掘されたピラミッドに付属する施設はファラオのピラミッド建築、葬祭を維持した労働者居住区であり、そこではファラオによって編成された労働者組織（Phyle 組織）が一定期間居住したものと考え論じた。その際には、中王国時代のカフーン、新王国時代のアマルナ、デイル・エル・メディナなどの労働者居住区、そして、労働組織も比較した。

山藤正敏（東京都立大学）「ナイル・デルタ地方における後期先王朝時代から原王朝期にかけての編年をめぐって：土器編年研究を中心に」

エジプト後期先王朝時代から原王朝期にかけてのデルタ地方において、土器において急激な変化が確認されている。しかし、この移行現象は、とりわけ明瞭でかつ現在報告書が刊行されている唯一の遺跡であるブト遺跡において、移行以前と以後で報告者が異なるためその実態を把捉することが困難であった。そのため、これらのそれぞれの報告書において設定された型式を再び設定しなおし、条件の揃った新型式同士の比較を通して移行以前と以後の継続・断絶関係について検討した。また、ナカダ文化との接触について、特定の種類の土器に関して通時的変遷を分析した。以上より、移行期の継続的・断絶的様相が明らかとなり複雑な様相が通時的に示された。

第12回（2003．1．23）

小泉龍人（早稲田大学）「彩文土器の復原に向けて：ウバイド土器の模倣製作と焼成実験」

発表者は、大学の授業の一貫として学生に土器づくりを指導しながら、前6～5千年紀に西アジア各地で展開していたウバイド土器の復原製作を試みた。テラコッタ粘土（1キロ）に微量の切り藁（10グラム）を練り込んで素地とし、粘土紐を輪積み成形して、土器片を使ってケズリ・ナデの器面調整を行い、黒色の陶芸用絵具で幾何学文様を塗彩した。十分に乾燥した後、河川敷で野焼きによる焼成を行った。燠でつくった火床（ほど）の上に、約30個体の土器を置いてほぼ2時間火にかけたところ、大方の土器はススが切れる良好な焼き上がりとなった。今回の実験により、短時間の野焼きによる彩文の吸着度は良くなく、彩文土器は窯で焼いた方が有効であるという見通しを得た。今後の課題として、焼成前の法量・重量計測のタイミングや、焼成時の温度計測のポイントなどを改良し、より有意なデータを増やすつもりである。

久米正吾
早稲田大学大学院生
Shogo KUME
Waseda University

小泉龍人
早稲田大学文学部
Tatsundo KOIZUMI
Waseda University